

---

# 夕日、彼女とワルツを

龍島夏香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕日、彼女とワルツを

### 【Nコード】

N1923L

### 【作者名】

龍島夏香

### 【あらすじ】

高校一年の五月。父が突然いなくなった。主人公の藤川圭吾ふじかわけいごは家庭の為、都内の高校へ転校する。転校すると同時にいじめ。毎日いじめにあっても彼が学校に通う理由とは・・・

## プロローグ

「普通ってなにさ？」

オレンジ色に染まったカーテンが、閑散とした教室で踊っている。

規則正しいかけ声が聞こえる。

夕日よりも明るい髪が、

カーテンよりもしなやかに踊る。

「普通ってのは、シカトとかそついうのがなくてさ、仲間と冗談  
言い合えることだよ。」

僕の声は震えていた。

電柱のように立って。

今日はよく風が吹く。

時々カーテンと彼女がダンスする。

「僕はただ、平穏な毎日を過ごしたいだけなんだ。みんなみたい  
に」

黒板の日付を見る。

あと20日我慢すれば僕は解放される。

「じゃあそつすればいいのに。」

「できたら苦労しないさ！」

教室が怒りで満ちる。

どんどん教室が赤く染まる。

「それじゃあ何も変わらない。」  
そういつて彼女の姿は見えなくなった。

カーテンだけがワルツを。  
夕日が沈む。

夏休みが待ち遠しい7月。

5月。第一志望の高校に、満足して通っていた。  
新しい仲間もでき、中学校からの仲間とも相変わらず仲が良かった。  
部活動は大変だけど、帰り道に食べるパンが旨かった。  
中学から付き合っている彼女とも未だに続いている。

その日がくるまでは。  
いつも通りだったんだ、家に帰るまでは。

「父さんがいなくなったの。」  
母が帰ってきたばかりの僕に伝えた最初の一言。  
最初は意味がわからなかった。

「ひとまず、メシ。」と、言うと同時に泣き崩れた母。僕はただ、  
母を見つめていた。どうしていいのかわからないから。  
一通り泣き、ゆっくり語り始めた。本当に、家から出て行ったら  
しい。振り返ってみれば、入学式を終えた以来父とは顔を会わせて  
なかった。父は僕が小さい頃から帰りが遅く、時には残業で帰って  
こない日が多々あったので気にもとめてなかった。

僕にとって父が家に居ないことが当たり前になっていった。

だから、父が帰ってきてないことに気付かなかった。母曰く、携帯に連絡しても繋がらず、会社も最近辞任していたらしい。

「なんでもっと早く言わなかった？」

「今日、お金を下ろしに行ったら、口座に、無かったのよ。」

ティッシュで鼻をかみ、目を真っ赤にして話す。僕は母を他人のように見つめていた。

「私、恐くて。」

「何が？」

「自分が、パパに捨てられたって、認める事が。」

それから僕の人生は狂った。母方の実家にお世話になることになり、僕は名前を聞いたことのない高校に通う事に。通えない距離じゃないと反発したが、叔母がダメだと言った。母は壊れて薬を飲んでいる。よく泣く。

「ケイちゃんが居なかったら、ママ、死んじゃう。」これが最近の口癖。

僕は知らない高校に愛着なんてわかなかった。そして、転校早々いじめにあった。初めはシカト、次にモノがなくなったり、逆に増えたり。気付けば学校で言葉を交わす人が居なかった。

心はぼろ雑巾。家庭もぼろぼろ。

いつそ、非行に走ろうか？それとも引きこもり？この際死んでやるうか？

誰もいなくなった教室で、黙々とゴミ箱から私物をかき集める。リプトンやガムが付着した教科書。

僕が何をしたっていうんだ。

ゴミ箱の前で声を殺して泣く。ああ、死にたいなって思った。

そして少しずつ、いつそ死ぬなら

みんな殺してやろう。

つと考えが浮かんだその時、ふと人の気配がして振り返った。見知らぬ女子生徒が、僕の方を見ていた。

僕は睨み付ける。今の僕なら、殺せるぜ？くるなら、来いよ。

「・・・はは、馬鹿らしい。」

彼女はふふつとあざ笑うように笑った。

「何が？」

そういえば、筆箱にカッターナイフがあったな。彼女の方へ近づくと正確に言えば、自分の席に。

「あんた、誰？」

ああ、あつたあつた。カッターナイフ。僕は手に隠してゆっくり彼女の方を見る。

「は？あんたクラスメイトじゃないの？」

近くで見ると、彼女は陶器のように薄い肌をしていた。目は相変わらず僕の方を見ている。

「そこ、あたしの席なんだけど、あんた誰？」

彼女が僕の席を指さす。

「意味がわからないんですけど。ああ、“消えてくれ、お前はクラスメイトなんかじゃないの”って言いたいわけ？」

「君、いじめられて居るんだ。」

瞬時に彼女の脇腹を刺した。意外と簡単にできるんだな、って思った。

「・・・可愛いそうなお子。」

冷たい声が全身の血の気を引いた。

「あんた、誰？」

彼女は同じ質問を繰り返す。痛み苦しむ気配がない。僕はゆっくり、カッターナイフを引いた。血が付いていなかった。手が震え、身を

引いた。怒りの目から恐怖の目で彼女を見つめる。

「あんだこそ、何者だよっさ、っ刺しても血がでないって。」  
カーテンがぱつと舞い上がり視界を遮った。

そこには、誰も居なかった。

「藤川君、ちょっといいかな。」

終了式。担任が下駄箱前に立っていた。僕は黙ってうなずき、先生の後をついて行った。日頃一年生は使えないエレベーターに乗り込み、4階で降りる。この学校に興味が無かった僕は、自分の教室や理科室など限られた場所しかしない。4階はしんとしていてどことなく、埃ばかった。担任はある教室前で立ち止まり、振り返る。

「率直に言おう。クラスを変えないか？」

あまりにも突然すぎて、固まった。

「いや、君がいじめにあっていると聞いてね。」

知ってたくせに。今まで見て見ぬふりをしていたのに。

「無理することはない。君の顔を見ればわかる。」

「どうして、突然？」

「君に死んでもらったら困るんだよ。わかってくれ。」

僕が死ぬ。考えてなかったと言えは嘘になるけど。

担任の目は真剣で、期待している言葉を僕の口から出るのを待っているようだった。

「わかりました。でも一つだけ質問、いいですか？」

なんでもきいてくれ、と安心した顔で僕をみる。

「ここ、どこですか？」

「ああ、新しいクラスだよ。」

「いえ、そうじゃなくて。」

先生の頭上にある札にはD組と書かれていた。それを指さす。

「一年D組、ってうちの学校は数字組だったと思うんですけど。人気もないし、なんかヤバイ感じがするんですけど。」

「このクラスだけ特別なんだ。」と、僕の型に両手を置く。

「きつと、君とって居心地が良いはずだよ。」

ニコリときこちなく笑って先生は立ち去った。逃げるかのようには。

くもり硝子の置くには、何があるんだろう、まあ。どうでもいいか。明日から学校ないんだし。

ゆっくり、ドアを開けた



ドアの向こうは異世界。“色とりどり”の人々が、教室でくつろぐ。教壇では、裾が絵の具で汚れた、鳥の巣の様な髪型の先生が出席をとっていた。曇ったのメガネ。僕を見るなり微笑んだ。黄ばんだ歯。

「やあ。君が噂の藤川圭吾君だね？ささ、こつちへ。」

僕を教壇に呼び寄せ、先生は僕の肩に手を置いた。BVLGARIの香水が漂う。

「えー、今日から我がクラスの仲間となる藤川圭吾君だ。」

本を読む人、携帯をいじる人、ゲーム対戦をやる人達、窓の外をずっと眺める人。皆自由に僕にあまり関心がないようだ。

「まあ、いつもこんな感じだから気にしないで。席は空いているところに座って。毎日変わるから。自由に、ね。」

はあ、と返事をし、空いている席を探した。ぐちゃぐちゃに並んだ席。先生は一人で英語の授業を始めた。とても流暢に教科書を読み上げる。スラスラと筆記体で黒い黒板を埋め尽くした。美術の先生じゃないのか。いや、そんなことより今日は終了式なのに誰も何にも言わない。教科書を開くものもいれば、相変わらず自由に振る舞う者、まさに自由と言う名の無法地帯。

「ねえ、君。見えたんだって？」

目の前に座っていた、頭に大きなお団子ヘアを作った女子が話し掛けてきた。

「見えたって？」

「だあーかあらあー、3組の金髪女子。専らの噂。」

満面の笑みで目をキラキラさせる。

「彼女、無愛想でしょ。んでもってスツゴク美人。」

僕は身を乗り出して叫ぶように聞いた。

「君、見えるの？」

誰も僕らの会話に興味を示さない。

「もちろん。」

彼女はすつとポラロイドカメラを取出し、僕を撮った。

「あたし、<sup>さおり</sup>冴織。みんなにはサツちゃんって呼ばれてる。」

撮ったばかりの黒い写真がうつすらと形を映し出す。

「今度、彼女の写真見たげる。スツゴク綺麗なんだ。」

「彼女ってその、幽霊とかなんですか？」

「そっだよ。」

当たり前でしょ、と言う口振り。驚く僕を見てニコリと笑う。

「君、えつと圭吾君？驚いた顔、素敵だよ。ほら。」

先程撮った写真には間抜けな顔をした僕が写っていた。

「ここにいる子はさ、みーんな個性が強いんだ。例えば……あそこでゲームに熱中してる4人組。彼らはいわゆる天才でね、全国模試1位の四人なの。四人とも満点。授業中はああやって、いつも四人で遊んでる。で、あそこでトランプをいじっている子。彼女は医者の一娘でね、どんな病気でも一目診ただけでわかっちゃうんだって。」

冴織はふうと一息ついた。

「こんだけユニークな人達が集まると、何が普通で何が普通じゃないのか解らないよね。」

僕はふつとあの言葉を思い出す。彼女に向けて発した言葉。“みんなみたいに”なりたいと願った、あの言葉。

「うちら、特別クラスじゃない？つでもさ、そりゃあ他人よりちよつぱり個性が強いけど、ここにいるみんな“特別”なんかじゃないんだよね。全然。」

冴織はクラス全体を映し出す。黒い写真が色鮮やかな風景へと変わる。虹色の教室。チャイムが鳴る。先生は授業を辞め、教室を去る。授業中でも、休み時間でも変わらない。自由な教室。窓から暑い風が吹き込む。冷房と入り交じって、なま暖かくなる。

「次、プールだね。」

冴織の元に一人の女子が。フランス人形の様な彼女は、ウサギの力バンを握りしめ、立っていた。

「あたしは入らないよ。圭吾君は？」

「僕は、水着をパクられたから。」

パクられ、女子更衣室の、クラスで一番人気の女子の下着とすり替えられていた。変態だと怒る女子。爆笑する男子。死にたいと思つた。嫌な記憶が蘇る。

「てかさ、なんで普通に授業やってんの？終了式は？」

「私の貸してあげようか？悩んだから二着持ってきたの。」

僕の問いかけを無視し、ごそごとウサギのカバンから、薄ピンク色で、白フリルが付いたスクール水着と、水玉模様のスクール水着が出てきた。

「あ、いや、気持ちだけで。」

「遠慮しなくていいのに。」  
残念そうな顔をする。

「麻弥まやのは女子用だから、圭吾君には着れないんだよ。」と冴織が言い、麻弥と呼ばれた女子は納得した様子で去っていった。

「あの子、秋葉では人気アイドルなんだよ。天然なんだ。それよ  
りさ、次うちら暇だから写真部に来ない？彼女の写真みせたいし。」

「だから、終了式は、」

「そんなの、ないよ。うちのクラスでは自由なの。やりたい人がやって、やりたくない人はやりたいことをやるの。圭吾君が終了式やりたいって言うなら体育館行けばいいだけだし。」

それってどうなの、と思つた。なんなんだ、このクラスは、と。  
でも、今はどうでも良かった。彼女の写真が見られるのなら。

写真部は北校舎の3階にあった。中に入ると狭く、そこら中に物が散乱、壁には様々な写真が飾られていた。山積みになされたアルバ

ムを漁る沙織。僕は壁に貼られた不思議な写真を丹念に眺めた。

「これ、冴織さんが全部撮ったの？」

ここにはないな」と言いながら次々アルバムの山を漁る、バラバラと音を立てて山が崩れる。

「うちだけじゃないよ。歴代の写真部員が残してきたものもあるし。あと、冴織さんって呼ばなくていいからね。あった。」

冴織は奥の方に眠っていたアルバムを取出し、僕に手渡した。表紙には『00年アキコ集』と書かれていた。

「8年前の？」

「そう。8年前から彼女がいるみたい。あ、アキコって言うのはそのときの部長が適当に付けたんだって。“彼女本人に名前を聞いても教えてくれないから”。」

僕は分厚い表紙をめくった。黒い色紙に貼られた写真。言葉に言い表わせないほど、

綺麗だった。

写真に写る彼女は、僕が見えている姿そのままだった。8年前からずっと時が止まったまま。

「あたしが撮った写真はこれ。」と冴織が一枚の写真を指差した。そこには夕日を眺め、オレンジ色のカーテンがなびく。彼女の髪の毛がキラキラ、水辺の様に輝く姿が映し出されていた。

どこか寂しげな目。

「あたしさ、ちょうど7年前の文化祭でこれらの写真にであつたね。感動しちゃって。入学しよう、って決意したんだ」

「え？7年前？つてことは…小学生の時？」

冴織はアルバムを閉じ、首を振った。僕はそれ以上何も聞かなかった。

今までの日常が嘘のように、学校が楽しくなった。D組という、変なクラスになってしまったけど。以前より、幾分居心地が良い。誰も僕に関心がないように初めは思えたが、僕が彼らに関心を持つと、彼らもちやんと答えてくれる。

黒い色紙に貼られた写真。言葉に言い表わせないほど、

綺麗だった。

写真に写る彼女は、僕が見えている姿そのままだった。8年前からずっと時が止まったまま。

「あたしが撮った写真はこれ。」と冴織が一枚の写真を指差した。そこには夕日を眺め、オレンジ色のカーテンがなびく。彼女の髪の毛がキラキラ、水辺の様に輝く姿が映し出されていた。

どこか寂しげな目。

「あたしさ、ちょうど7年前の文化祭でこれらの写真にであってね。感動しちゃって。入学しよう、って決意したんだ」

「え？7年前？ってことは…小学生の時？」

冴織はアルバムを閉じ、首を振った。僕はそれ以上何も聞かなかった。

今までの日常が嘘のように、学校が楽しくなった。D組という、変なクラスになってしまったけど。以前より、幾分居心地が良い。誰も僕に関心がないように初めは思えたが、僕が彼らに関心を持つと、彼らもちやんと答えてくれる。

今日は夕方から夕立。

朝、青々としていた空も、夕方には黒い固まりが空を覆っていた。ズツシリ、重みがある。始めはポツポツ、そしてシャワーの様に空から雨が落ちてきた。

「あー、降ってきちゃったね。この様子だと雷も鳴るかも。」

健司<sup>けんじ</sup>は目を細めて外を眺める。真っ赤な髪で、鼻から口にかけてチーンがかかっている。パンク系の格好をした彼は、こう見えても父が営むペットショップを毎日手伝う、見かけによらず、な男子。僕が彼とぶつかった時は殴られるかと思った。意外にも彼は僕の心配をしてくれ、それ以来よくつるむようになった。

「圭吾は傘持ってきたか？」

「いや、忘れた。」

「俺もなんだよなー。この雨だと……まあすぐ風呂に入れば大丈夫か。」

「走って帰る気？」

「もうすぐチビが生まれるからさ、じゃ。」

健司はカバンをブレザーの中に入れ、抱え込んで教室を出た。僕は誰もいない校庭を眺めた。遠くの方から時々雷がひかる。雨足は強くなる。湿気を帯びた生暖かい風が教室に吹き込む。

ただ無心に、外を眺める。ざわついていた教室が、いつの間にか静かになっていた。雷の音と光の間隔が狭まる。今何時だろう、ふと気になり教室へ視線をやった。

彼女だ。

僕は息をのむ。クラスを変えて以来、はじめて彼女に会った。彼女は廊下からこちらをじっと見つめていた。

「久しぶり」

普通なら、霊になんか話し掛けない。

「学校、辞めたかと思った。」

普通なら、霊と会話なんか出来ない。

「元担任が、クラスを変えてくれて。」

ピカリとひかり、直ぐ様音が鳴り響く。

「それはよかった。じゃなきゃ、あたしの座る場所が無くなるから。」

雨の音がよく聞こえる。ははっと僕は笑う。

「君、何ていう名？」

長い沈黙。彼女はじっと、こちらを見る。

「マキ。」

ピカッとフラッシュの様な光と轟音と共に、教室の電気が消えた。暗い教室。廊下の窓から差し光が彼女を照らす。不気味な色なんだけど、恐怖は感じない。僕の心に芽生えた好奇心。もっと、知りたい。

彼女はすつと歩き出した。僕は慌てて彼女の後を追いかけた。まるで取り憑かれたかのように。何時も静かな廊下も、いつも以上に静まっている。足音は僕のものだけ。

「何処行くの？」

彼女の隣に並んで歩く。横顔も綺麗だった。何処か、寂しげな横顔。始めて遭った時とは違う目で、僕は彼女をみる。

「こつち。」

彼女はそう行って階段を上っていった。ドンドン上がる。上がりきったと思うと、今度は長い廊下をまた歩き出した。雨でジメジメした学校。停電で薄暗い。ふっとマキが立ち止まり、すっと中へと入

つていった。何も書かれてない、中が見えない教室。僕はゆっくりとドアを開けた。ギシギシときしむ音。中は真っ暗で、ゴチャゴチャしていた。ここは物置らしい、入学式と書かれた看板や、パイプイスが置かれていた。埃っぽく、カーテンが閉められているせいか、今まで以上に薄暗かった。

ガタン

突然奥からもものが落ちる音がした。きちんと並べられた「卒業アルバム」。そのうちの一冊が地面に落ちたのだ。ゆっくりと近づき、手に取る。

『平成12年度卒業アルバム』

12年度・・・01年3月に卒業した人のアルバム。僕は胸が高まった。冴織から見せて貰ったアルバムと同じ年。ゆっくりとページをめくり、僕は彼女を捜した。一枚、一枚。めくると共に気になった。クラスが“数字”ではなく“アルファベット”。A組、B組。「いた。」

3年C組の個人写真の中に彼女がそこにいた。ただ、名前が違っていた。彼女の写真の下には「荒井真美」と記されていた。

「真美・・・君、マキじゃないの？」

「誰か居るのか？」

突然、廊下から声がした。僕は慌ててアルバムを戻し、出ようとした。

「こんな所で何をしてるんだい？」

担任の福原先生が廊下に立っていた。いつもと変わらず、汚い格好で。

「あ、いや、その。何でもありません。すみません」

動揺し、急いで立ち去ろうとした僕の腕をつかんだ。にこりと微笑



む。

「まあ。まだ外は雨だし。お茶していかないかい？」

叱られるのだろう、観念した僕はうなずき、担任の後をついていった。担任は黙って僕を美術室まで誘った。

「適当なところに座って。今日は部活がないから、貸し切り。」

担任は準備室から声をかける。油絵の具の二オイ。だたつ広い美術室、白い生首がずらりと並ぶ。相変わらず、外は荒れていた。

「はい、コーヒー。」

差し出された温かいコーヒー。真夏には似合わない。僕は礼を言って一口飲む。担任は黙って僕を見つめる。何を言っただいのか解らず、僕も黙る。雷が何度かひかたころ、やっと担任が口を開いた。「彼女については、あまり触れない方がよい。この学校では、ね。」

「何故ですか？」

担任は鳥の巣をボリボリと掻きむしる。

「みんな、触れて欲しくないのさ。少なくとも先生方は。」

「昔、何かあつたんですか？」

ピカリと外から光が差す。光と音の感覚が開いていく。

「好奇心旺盛。良いことだ。でも時に危険な目に遭うことを忘れちゃいけないよ。」

ずずつと残りのコーヒーを飲む。湯気で曇った眼鏡がさらに曇る。

「僕の口からは彼女について何にも言えない。決まりなんだ。」

僕はコーヒーに目を落とす。何故、この学校の先生は皆マキ、いや真美？のことに付いて触れないのか。一体彼女の身に何が起きたのか。

「僕から君へ言えることは・・・疑問の答えは地道な作業から生まれる。解らないことを調べる方法はいくつでもあるよ。お、雨が止んだみたいだよ。」

担任と僕は外に目をやる。思い雲が、徐々に消え、オレンジ色の太陽が見えてくる。

「僕から何も言えないが、僕が君の手助けをすることはできる。何かあったらいつでもおいで。」

「はい、ありがとうございます。」

僕は頂いたコーヒを一気に飲み干し、美術室を後にした。

ますます気になる、彼女のこと。何かあったのか、何故、書かれた名前と彼女の言う名前が一致しないのか。

「荒井真美？」

次の日、僕は冴織に昨日あったことを全て話した。今日は簪で髪を束ね、赤縁眼鏡をかけていた。冴織は腕を組む。

「でも彼女は自分の事をマキって言うんだ。」

おはよう、と麻弥が近づいてきた。今日は花柄のワンピースと白手袋をまとって。

「ねえ、荒井真実って卒業生知ってる？」

「いつの卒業生？」

「12年度。」

「居たはずだよ。でもちよつと待って。」

麻弥は籠バックから携帯を取出した。

「この子、人の名前を覚えるのが得意なの。授業中は暇だからって、電話帳や歴史の人物を見て覚えてるんだって。」

「はあ。」

毎度このクラスメイトには驚かされる。僕は誰かを驚かせるような特技は何一つ持っていない。

「んー。って事は、彼女はいつ死んだのかしら？」

「どう言うこと？」

ズレた眼鏡をクイと上げる。

「私が彼女の写真を見たのは2001年の文化祭。卒業写真にも写ってるって事は、00年卒業写真の撮影時まで生きていた。」

「でも君の部活に置いてあるアルバムには『アキコ』って。そこに写る彼女は霊で、名前を教えてくれなかったからアキコと名付けた。」

「そう。と、すると卒業写真は前撮ったものを使い回した。もしくは……」

「もしくは？」

「部長が生きている彼女を死んでいると偽った。」

「……だとしても、彼女が死んだことは代わりがない。」

「いたいた、荒井真実。」

麻弥は未送信メールを僕等に見せた。そこにはズラリと人の名前が記されていた。

「面白いことに、」

麻弥はゆっくりとスクロールする。僕等は驚き、顔を見合わせた。

「石川真紀と……山田晃子。」

カラーコンタクトを入れた青い目が悪戯に微笑む。

「これって何か関係あるよね？」

興奮した冴織が顔を近付ける。

「わからない。単なる偶然かもしれない。マキもアキコもありふれた名前だから。でも……」

「でも？」

「調べてみる価値はあるかも。」

僕等は朝の出席が終わると麻弥はパソコン室に、冴織は図書室、そして僕は昨日行ったあの場所へと向かった。小さい頃、隠れ基地を作った時のように胸が高まった。今までの僕とは思えないほど、生き生きとして。僕は、昨日の場所へとむかった。だが残念な事に、昨日行った教室には鍵が掛かっていた。僕はそのまま美術室へと向かう。授業中の教室を通り抜けて行くのは、何だか気が引けた。今日は美術準備室の扉が開いていて、先生が机に向かって作業をし、女子が一人、黙々となにかのデッサンをしていた。

「あの、すみません。」

担任はいつもの笑顔でどうぞ、と中へと招き入れた。

「僕も数学は好きじゃなかった。」

はじめの一言に、なんのことか検討もつかなかったが、今日の一限

が数学だと思い出した。

「物事を理屈で考えてる感じがしてね。」

僕が授業をサボっている事をなんも咎めない。

「先生、お願いがあるんです。昨日のあの場所、開けてもらえませんか？」

「アルバムならここにあるよ、全部。」

担任は僕が何を企んでるかはお見通しの様で、棚を開け、ズラリと並んだアルバムを僕に見せた。

「どうしてアルバムが見たいってわかったんですか？」

「僕だったらアルバムから探すからね。彼女が気になるのであれば。」

なんでもお見通しという口ぶりの担任。ははっと苦笑しつつ、早速12年度のアルバムを見つけたすとその場で開いて昨日の写真を探した。

おかしい。

昨日みたはずの写真には荒井真美の名前がちゃんとあるのに、写真が彼女ではなかった。慌てて山田晃子と石川真紀の名前と写真を探したが、山田晃子はD組の担任で、真紀はF組の、ただの女子だった。僕は最後のページにある卒業生の住所一覧をみた。しかし表紙があるだけで後は全部抜き取られていた。

「あの、住所一覧は」

「つい最近個人情報について厳しくなっただろう？それ以来学校にある住所一覧はみんな取ってしまったんだよ。」

「…そうですか。」

僕はゆっくりアルバムを閉じ、元の場所に閉まった。女子がデッサンする鉛筆の音がよく聞こえる。昨日みたアルバムでは確かに彼女が写っていたのに。あれは幻覚だったのだろうか？礼を言って図書室に向かった。図書室には既に冴織と麻弥が居た。何も言わず、僕

は彼女たちの向かい側の席に着く。

「まずは圭吾君から」

冴織が仕切る。

「昨日行った場所には鍵が掛かっていた。担任の所に言ったらアルバムを見せてくれたんだけど……」

「けど？」

「それが…写真が違っていたんだ。真美の写真が。住所一覧は個人情報保護により抜き取られていた。」

そう、と冴織が呟く。

「次、あたしね。ネットで三人名前を検索してみたの。予想はしていたんだけど、生徒の名前はヒットしなかった。でも、先生の名前はヒット。今は鳥取県にある学校の先生をやってるみたい。そのホームページに書いてあった学校のメールアドレスはメモしてきたよ。最後に麻弥。」

「8年前付近に学生が死んでないか、新聞記事から探したの。でも無くって」

三人は肩を下ろす。

「やっぱ、あの教室にあるアルバムが気になる。」

「でも先生があそこの鍵を貸してくれそうにないわね。」  
僕はうなずく。

「鍵は私がかする。」

麻弥が携帯を開き、メールを打ち出した。

「じゃ、あたしは晃子先生がいる学校にメールしてくる。」

そういつて冴織は立ち上がり、図書室を後にした。僕は何か出来るわけでもない。でも何かやらなきゃいけないと思い、写真部へと向かった。僕等は彼女に執着する理由なんてなかった。ただ、なんのために学んでいるのかわからない勉強に時間を費やすより、断然こっちのほうがやる気も出るし、興味が湧いた。それと同時に、勉強をしていない自分に少し焦りや罪悪感を感じていた。皆が勉強しているのに、うちのクラスでは勉強している人なんて限られているし、

自分もそんな環境に甘えているような気がして、苛立ちを覚えるようになって。だからと言って、自主的に勉強する気にはならないのだけれども。

僕は写真部の扉をノックした。中から返事があつたので少し驚いたが、失礼しますと言って中に入った。中には脚を組み、ジャンプを読んでいる男子がいた。

「新人？」と、こつちには目を向けず、気怠そうに話し掛ける。

「いえ、冴織さんのクラスメイトの藤川です。ちよつと写真が見たくて。」

今度はチラリと僕を見て、また漫画に視線を戻す。

「あの、アキコさんの写真、見せてもらつていいですか？」

彼は漫画に目を向けたまま、片手で棚をあさる。黒いアルバムを掴むとそれを引つ張り、無言で手渡した。バタバタと積み重なつていたアルバムが崩れる。お礼を言つて、僕は一枚ずつ写真を確認した。何か手掛かりがないか。写真の背景はどれも校舎内で、年や日付が変わつても、写っている彼女は変わらぬままだった。笑顔の写真は、一枚もない。

「あの、このアルバムに書いてある名前、写っている人の本名じゃないんですね？」

「らしいね。」

「この女子のこと、何か知りませんか？」

「全然。」

「じゃあ、アキコって名付けた人の名前は？」

「さあ。だいぶ前の部員だから。」

「そうですか。」

男子は相変わらず漫画に夢中で、僕は写真をただ眺めた。

「そう言えば。」

漫画を読み終え、ジャンプを閉じ、僕をまじまじとみる。

「その写真を撮つたひとは解らないが、当時の部員が渋谷にあ

る小さな写真館で働いているらしい。確か名前は…… kunio、  
だったっけな。ローマ字で kunio。」

「kunio、ですか？ありがとうございます！」  
僕は急いでパソコン室へ向かった。何か、何か解るかもしれない。  
階段を駆け上がり、踊り場に着いたとき、

彼女が上の階段に座っていた。こちらをじっと見る。

「びっくりした。」

彼女は何も言わない。

「君のことが、解りそうなんだ。今から調べに行くところ。」  
ただ黙って、こちらを見つめる。

「君の本当の名前は荒井真美だろ？」

彼女は黙って首を振る。

「でも、昨日見たアルバムの写真には、そう書いてあったんだ。」

「イシ……マキ。」

彼女はボソリと呟く。

「石川真紀？」

今度はうなづく。

「さつき美術室にあるアルバムを見たけど、君ではなかったよ？」  
首を振る。

「君はいつ死んだの？」

彼女は片手を開き、僕に見せた。

「五年前？」

彼女は首を振る。

「え、じゃあ。」

上から階段を降りてくる音がし、彼女はフツと姿を消してしまった。  
それと同時に目の前に冴織が現れた。

「いま、居たよね？！」

冴織が興奮した声で僕に尋ねた。と、同時に僕の携帯が鳴る。麻弥  
からだ。



「もしもし？」

『あ、圭吾君？私、麻弥だよ。鍵は今日の放課後には手に入りそう。そっちは？』

冴織に目をやる。冴織が手を出したので電話を渡す。

「もしもし？麻弥？こっちはやることやったよ。……うん、うん。……わかったじゃあ今からそっちに向かうから。じゃあコモンスペースで……」

『あれっ……』

「どうしたの？」

『彼女が現れたッッ』

「うそっ、凄じじゃない」

冴織が突然大きな声を出す。話の内容がよくわからない僕はただただ黙って冴織をみつめた。

『でもまっつて、何か様子が変わるの。スッゴい私を睨んでる。』

「え？」

『ザ』

僕の耳にも聞こえるほど、大音量の砂嵐の音。

「もしもし？麻弥？麻弥？？」

電話が切れた。

「麻弥に何かあったみたい。」

「今どこに？コモンスペース？」

「わかんない。多分図書室から動いてないと思う。」

僕等は急いで図書室に向かった。冴織は走りながら電話の内容を僕に伝える。

## 四

「良かった、先生、麻弥の意識が戻ったみたいです。」

麻弥は図書室からちよつと離れた廊下に倒れていた。意識を戻したばかりの彼女に、冴織は問いただした。彼女が現れ、突然こつちに向かつて来るなり殴られたらしい。摩耶は氷の入った袋を頭にあてながら淡々と話す。

「彼女が人を襲うなんて、考えられない。」

「なんで彼女をかばうの？麻弥、怪我したんだよ？」

いつになく取り乱した冴織は僕をにらみつけた。ごめん、と謝り、僕はそれ以上なにも言わなかった。そう言えば、担任が言ってたな。好奇心旺盛なのはいいが、時に危険な目にあうって。彼女は僕等に何かを伝えたいんじゃないかって思った。でもそれは間違いで、本当は近づくなんて意味だったのだろうか？

放課後まで僕は一人、あの教室前で座っていた。窓の外から蝉の鳴き声がよく聞こえる。大きな雲がゆっくり流れる。暑い中、蝉は一生懸命だなんて感心したりする。

「おい、クズ。」

聞き覚えのある声に自然と身が強ばる。ヤツが、近づいてくる。僕はうつむいた。

上履きが床と擦れ、鳴り響く。高まる心臓。

僕の前に立ち止まる。

身をキュツと固くする。

それと同時に蹴られた。

脇腹に足が入り込み、息が出来ない。

「クズって呼んでんだよツツ聞こえねーのかクズ。」

咳き込む。

「返事は！！」

「はい、すみません、」

元クラスメイトの竹内。彼を筆頭に、毎日暴力を受けていた。身体中あざだらけになっている。新しいクラスになってから、怯えることなく寧ろ楽しんでいた学校生活。それが夢であったように、彼が夢をみている僕を覚ます。

「D組でいい気になってんだって？クズ。」

大きな手を僕の頭の上に乗せた。ギリギリと力が入り、爪が皮膚をえぐる。痛いと言えば力が強くなる。だから黙って歯を食いしばる。

「麻弥に手エ出したらブツ殺すかな！」

そういつて立ち去った。何が何だか解らなかったか、悪夢から解放されてほっとした。ふと、視線の先には鍵が落ちているのに気がついた。脇腹に手を当てながら立ち上がり、鍵を拾う。なぜ竹内が鍵をもっていたのかはわからないが、急いで教室の中に入る。彼のことだからいつ気が変わって戻ってくるかわからないからだ。クーラーが効いてない、むし暑い教室に入ると、アルバムのある棚へと向かった。誰も手を付けていない棚。埃がかぶっている。僕は迷わずアルバムを抜き取り、辺りを見渡す。また彼女が現れないだろうか、と。しかし彼女は姿を現すことがなかった。蒸し暑さに耐えられず僕は教室を後にした。コモンスペースでアイスクリームを食べている二人が僕を見るなり駆け寄ってきた。麻弥の傷は大したことがないようで、人目につくから、と冴織は皆で写真部へと向かう。脇腹を押さえながら走る僕を見て麻弥が心配する。

「さとるが何かしたの？」

「さとる？ああ、竹内のこと？いや、何でも。ってか竹内とどんな関係？」

「彼氏だよ。」

驚いた。

「意外って顔してる。ごめんね？彼って少し暴力的なところある

から。怪我はない？」

心配そうな顔で僕の手を見る。大丈夫、かすり傷だから、と嘘をついて安心させる。そうこうしているうちに写真部に着き、僕らは机にアルバムを広げた。僕等はまずC組のアルバムを確かめた。二人は顔を見合わせ、僕は少し安心した。荒井真美の名前の上に、間違いない彼女が写っていた。D組の担任は、40代後半くらいの、おばさんだった。冴織は携帯カメラで写真に納め、最後にF組の石川真紀の名前と写真を探した。

凍る空気。冷房の音。

誰も、何も言わない。いや、言えなかった。今まで一番の驚きだった。

「どういう事？」

麻弥が沈黙を破る。冴織がC組とF組の写真を何度も見比べる。

「まっつて、落ち着こう。もしかしたら間違えて写真を載せてしまったのかも。集合写真でさ、確認しよう？」

一番落ち着いていない僕は落ち着いたフリをして冴織に指示する。各クラスの集合写真を見る。どちらの写真にも、右上に“彼女”の写真が載っていた。

「有り得ないよ。どういう事?!何で荒井真美も、石川真紀も、どっちも彼女なわけ？」

今度は一番後ろにある、住所を見る。先生方は取り忘れたのだろうか、運良く住所一覧はそのままの状態だった。しかし残念な事に、荒井真美も、石川真紀も、どちらも「家庭の事情により掲載致しません」と記されていた。僕等は椅子に座って一息つく。僕は何が何だか解らず、頭の中で事実を整理した。冴織と麻弥は顔を近付け、懸命にアルバムを眺めていた。

「ねえ、」

冴織が手招きする。僕は急いでアルバムを覗き込む。

「これ、一年生の移動教室の写真ね。ほら、ここ。彼女が二人、

写ってる。」

冴織が差した写真には、皆でバーベキューを楽しんでいる写真だった。右端に彼女、そしてセンターよりやや左に彼女が写っていた。もう1ページめくると、今度は一年時の全員写真があり、今度は麻弥が、二人の彼女を指差した。

「で、学年が変わって2学年時の全員写真なんだけど、」  
ページを巡り、僕は全員の顔を一つずつ確認していった。彼女は一人だけ写っていた。

「冴織と一緒に探したんだけど、2年生以降、彼女が二人同時に写ってる写真はないの。」

「よくわかんなくなってきた。」  
僕はますます混乱し、頭をかきむしる。担任みたいに。

「私の予想なんだけど、彼女、双子だったんじゃないかな？」  
麻弥が髪の毛をいじりながら話す。

「でも二年生以降の写真には二人分写ってないよ？」  
「じゃあなぜ一年の写真と、三年の個人写真だけ、彼女が二人写ってるんだろう？」

「調べ甲斐がありそうね。」  
にんまりと、冴織が笑った。

七月。

蝉がよく鳴く、暑い夏だった。不思議なD組にも、夏休みがやってきた。

## 五

真夏。

皆、山へ行ったり海に行ったり実家に帰ったり。

東京の住宅地はシンと静まる。

僕の家は思い空気が漂っていた。父から連絡はない。母は沢山の薬を飲み、元々細かった身体が一層細く、やつれた。毎日寝たきり。起きたと思えば奇声を上げ、自分の両腕を抉るようにかきむしる。

蝉はよく鳴いている。

冴織は旅行がてら、鳥取にいる梶子先生の所に寄るらしい。僕は渋谷の写真館に足を運んだが、彼は二年前に独立し、今はアフリカで写真を撮りに行っているらしい。夏休みなのに、何もすることがない。テレビゲームも、インターネットも、飽きてしまった。健司とは何度か遊んだが、ペットショップの手伝いが忙しいらしい。

壊れた母とただ毎日静かな家でただただ、長い一日が終わるのをじっと耐えるだけ。

このままではいけない、そう思い行動したのはお盆時。部活動も、先生も居ない学校に侵入する。廃校みたいに、静か。下駄箱には上履きだけが、ズラリと並ぶ。前のクラスの下駄箱に向かい、竹内をはじめ僕が嫌いな男子の上履きを左右逆さまにしとく。小さな反抗前のクラス、窓際の一席に彼女がひとり、座っていた。黙って近づき隣に座る。長い間、ただ座っていた。暑さに耐えられず窓を開ける。今日は風が吹いていない。ワイシャツの袖で額の汗を拭う。

「誰も居ない教室は、寂しい」

彼女は視線を外に向けたまま、ポツリと呟く。

「真紀はいつもここにいるの？」

初めて彼女の名前を呼んでみた。彼女は振り返り僕の顔を見る。

「私は学校の外には行けない。」

悲しそうな顔をする。僕はそう、と呟く。

「でも、お盆と、正月はね、家に帰れる。外に出られる。」

「良かったじゃん。実家はどこ？」

彼女はうつむく。

「実家はもうない。両親は、私を供養してくれてないから。」

「酷いね。真紀の、えつと…お墓は？」

「千葉にある。海がよく見える所。でも千葉に思い入れはない。」

「そっか……。あ、ねえ、どうしてこの前？麻弥を殴ったりしたの？」

「麻弥？誰、その人」

「ほら、僕といつも一緒にいる、ロリータ風、わかるかな？フラン  
ス人形っぽいつて言った方がわかる？」

「知らない。」

「ちよつとまつて、たしか携帯にプリクラがあつたはず。」

「自分が見たいものしか、見えないんだよ。私達は。」  
顔を上げ、真紀を見る。

「しかも、私は人にも、物にも触れられない。」

「そっか、そうだね。ごめん、変なこと言つて。」

じゃあ、麻弥が見たのは、一体誰だったんだろう。

ジワジワと鳴く蝉。

悪いことしたな、というちよつとした罪悪感から、口を開く。

「ねえ、今は外に行けるんだろ？お盆だし」

「うん。」

「どっか行きたいとこないの？暇だし。付き合つよ？」

馬鹿な事を言うな、って自分でも思ったけど、

「本当？本当にいいの？」

初めて彼女が興奮して話す姿をみて、どうでも良くなった。彼女が霊であるうと。

「渋谷に行ってみたい。09に。」

「マルキュー？ああ、109ね。わかった。じゃあ明日の10時に 駅に集合…来れる？」

彼女はうん、とうなずく。霊と渋谷に行くなんて、映画やドラマみたいだと思う。非現実的すぎて僕はどうかしてるとも思う。でも、父が居なくなり母が壊れ、僕はいじめにあい…みんな自分には関係ない話だと思つた出来事が起こつた今、何が普通で、何が普通でないのかわからなくなった。教室を出る間際、

「約束だよ。私、待ってるから。」と言う彼女に手を振り学校を後にした。

10時。改札前の柱に彼女は立っていた。いつも通り彼女は制服姿。

「ごめん、待つた？」

「昨日からずっと。」

「はあ？疲れたでしょ。」

「面白い事言うね。」

彼女はクスツと笑う。初めて彼女の笑い顔を見た。僕は渋谷迄の切符を一枚買って、電車に乗り込んだ。電車の中では無言。本当は色々彼女に話掛けたいんだけど、流石に周りの人の視線が気になつてしまう。お盆で人気がない住宅地と違い、渋谷は人がたくさんいた。

「てかさ、何で制服なの？」



渋谷なら、独り言を行っているように見える僕に誰も気に留めない。

「制服姿で燃やされたから。」

「ごめん。」

「謝らないで。」

スクランブル交差点。人の波に乗りながら、銀色に光るビルに向う。店内は冷房が効いてて涼しかった。が、僕がいるべき場所じゃないと気付いた。女性ばかり、きらびやかな服や、小物がずらりと並ぶ。茶髪で細身の店員が呼び込みをする。彼女は嬉々として色々な店の中に入っていた。僕は店の外でただ彼女を眺めていた。周りの人には見えない彼女。

「この店、みていい？」

彼女はLIZLISAとかかれた、なんとも女の子らしい店に入っていた。フリフリ、白やピンク、花柄のワンピース。彼女が手招きする。僕は中に入るのをためらいつつ、ゆっくりと彼女の傍にいく。

「これ、可愛い。」

彼女が指差したワンピースを僕は手に取る。白い生地、中生地に花柄。二枚重ねでウエストには薄ピンクのリボン、背中には白いリボン。

「いかがですかあ？これ、新作で一番人気なんですよう。」

髪の毛をクルクルに巻いた、店員が話し掛けてきた。僕は戸惑う。

「彼女にプレゼントとかですかあ？」

「あ、はい。でも、」

「じゃあこれぴったりだと思っんですよ。人気で、白は今出てるのしかもうないんです。これの色違いですけど、あそこの店員が着てます。きつと彼女、喜ぶと思いますよお。」

確かに、可愛いと思った。でもこれを買ったって彼女が着れるわけがない。チラと彼女を見た。楽しげに店内の洒落た商品、同年代くらいの客をじっと見つめていた。無邪気で、でもどこかしら寂しげな目。ああ、私もこんな格好して、こうやって友達とお買い物で

きたらな・・・と言っているかのような。

「じゃあこれ、買います。」

ありがとうございますと店員は笑顔。可愛い紙袋に包装してくれた。こんな姿を知り合いに見られたら間違いなく誤解されてしまう。急いで僕は持ってきた鞆の中に押し込んだ。

「千葉に行こうか？」

マックで一人昼ご飯を食べながら、迎えの席にいる彼女に話しかけた。若者でこった返した店内では、もちろん僕の声なんて誰も気にしていない。

「いいけど、なんで？」

「なんとなく。」

「じゃあ行こう。」と、言うなり彼女は走って行く。人混みを通り抜けて。僕は身体をよじり人混みを掻き分け彼女の後を追う。

スクランブル交差点。人の流れに逆らい、メトロに乗り込む。いつもなら、嫌だといって行かない。いや、そもそも霊と話なんかしないし、霊になんかと渋谷に行かない。服なんか買わない。でも何故か、身体が勝手に動くかのように、彼女の言いなりになってしまう。

不快感はない。

新橋で乗り換え。千葉駅でまた乗り換え。

どんどん知らない世界。

どんどん高いビルから緑の景色。人気がない電車。彼女は外の景色を黙って眺める。

ガラス窓には僕しか写っていない。ゆっくり目を閉じた。彼女に起こされるまで、つかの間休憩。

駅から降りた、直ぐにバス。彼女の墓場につく頃には16時を回っていた。海風が気持ちよい。久々の、海。

ズラリと高台に並ぶお墓、彼女の姿は見えなくなった。僕は一つずつ墓石に刻まれた名前を見る。彼女の墓は荒れ果てていた。伸びきった雑草。僕はしゃがみこみ、丁寧に雑草をむしる。彼女が言っていた通り、両親は供養をしていないらしい。何だかとても、悲しい気持ちになった。だから無心で、ひたすらむしる。雑草をひと通り抜き終えたら水場へ。置いてあったバケツに水を汲み、タワシやスポンジを持っていなかったので、ハンカチを水に濡らして墓石を磨く。砂でカサカサになった墓石。白いハンカチは直ぐ茶色に染まる。

石川真紀の文字を一つずつ、拭き取る。干からびた花立てを水ですすぎ、雨水の跡が付いた香炉を綺麗に拭く。ばあちゃんと墓参りへ行っていた昔を思い出す。

『ご先祖様が眠っているお家なんだよ。だからスポンジやタオルで丁寧に磨かなきゃなんねえ。水は上からかけるでねえ。』

彼女のお墓は綺麗になった。僕は汗だくになったが、気持ちが良かった。

「香典がなくてごめん」

僕はそういって、買った服を供えて手を合わす。海風が吹く。

大きな夕日。

きらびやかに輝く水面。

カーテンのように、白いワンピースがふわりとダンスする。

夕日に輝く彼女の髪。

満面の笑み。

風が一吹き、

彼女がふわり。

「ありがとう」

彼女とワルツを。

唇が、冷たくなった。風のせいなのかそれとも。

家に着く頃には辺りは暗く、リビングには夕食が置いてあった。唐揚げと味噌汁、五穀米。電子レンジで一つずつ温める。

「遅かったね。」

叔母さんが起きてきた。毎日、保育園の仕事をしながら僕等の面倒をみてくれている。

「お母さんは？」

「寝てるよ。」

「お父さんは？」

「連絡ない。」

毎日の日課。それ以上の会話はあまりしない。叔母さんは台所で麦茶を飲む。僕は暖まった夕食を黙って食べる。テレビを付けて、気まずさを紛らわす。僕の知らないお笑い、芸をする。流行っているらしい、一発芸。ズグダズ・・よくわからない。何がおもしろいのか。

「明日、町内会の祭りがあるんだけど、来る？」

「行かない。」

知らない人ばかりの祭りなんて、面白くない。食器は自分で洗う。

「スイカ冷えてるよ。」

キュツと蛇口をしめ、タオルで手を拭く。冷蔵庫からスイカを一切れ取出し二階の部屋に向う。

スイカを食べながらメールを打つ。今日あったことを綴る。彼女にキスをされた。かも、しれない。もちろんこのことは書かずに送信した。すると直ぐに牙織から返信がきた。

『すごいじゃん（・・ノ）こっちは晃子先生と話できたよ 詳しくは新学期に話す（ 艸 ）楽しみにしてて』

なんで女の子は絵文字が多いんだろう、と思いつながら返信する。

『楽しみにしてる(笑)』

パタンと携帯を閉じる。目を閉じ、今日の出来事を振り返りながら。星の见えない東京。夏が終わろうとしている。

## 六

求めているときには手に入らないもの。そう実感する出来事があった。

あまりにもすることがなかったので、宿題であった『美術館巡りのレポートを作ることにした。担任だし。遠いけれども、上野森美術館へ足を運んだある日。現代美術の作品展があり、素人の僕でも引きつけられる作品や、僕にも描けるだろうとおもってしまふ作品もあった。パンフレットを手に取り、気になった作品のポストカードを購入して家に帰ろうと上野駅に向かう途中。

父さんが、居た。

間違えない。確かに父さんだ。知らない女性と、小さな女の子を連れて。

とても楽しそうに。

「パパ、ミユね、キリンさんみたい。」

女の子が父さんをパパと呼ぶ。シヨックと同時に怒りがこみ上げる。高校になった今、大人の事情、というものはどんなものは解っているつもりだ。

つまり、新しい家庭を持った。

僕は距離を置いて父さん達の後をつける。入場料600円。高いなと思っではいられない。見知らぬ女性は母さんよりちょっと年上か、

同じ年くらい。夏休みの動物園に相応しい、どこにでもある家族。ニシキジ、レッサーパンダ、インドライオン、スマトラトラ、ハートマンヤシマウマやアミメキリン。肩車したり、写真を撮ったり、ビデオを撮ったり。小さな麦わら帽子。遠い、昔の記憶がふと蘇る。僕がまだ小学生低学年か幼稚園の頃、動物園に行きたくて父さんに駄々をこねたことがあった。

「休みなんだから、久々に家に帰ってきたんだから、連れて行つてよ。」

でも父さんは何処にも連れて行ってくれなかった。高校になって、久々に家に帰れたんだからゆっくり家で寝かせてくれよ。」という父さんの気持ちはわかる。

すごく、悔しかった。

すごく、悲しかった。

どうして、父さんは僕と動物園に行ってくれないのに、その子と行くの？

心の中の、子どもの僕が泣く。僕は気がつけば、藤川家の父的役割を担っていた。だからわがままは言わないし、弱音は見せない。

でも、父さんからの愛情をどこかで欲している。絶対に、見せないけど。心には5、6歳の僕が、居る。オヤジと呼べない、僕が居る。

日が沈んできた頃、母親らしき女性と女の子はお土産売り場へと消えていった。父さんは近くのベンチに座った。今しかないとおもい、僕は早足で駆け寄る。目の前で立ち止まる。携帯をいじっていた父さんは見上げて、驚いた顔をした。殴りかけたい気持ちよりも先に、言葉が出た。

「どうして。」

声が震えていた。涙をこらえる。父さんは暫く黙っていた。携帯をポケットにしまうと、

「すまない。」

一言だけ、言った。そんな言葉は求めていない。

「すまない？ウチはどうするんだよ？母さん、毎日泣いてるんだよ！僕だって第一希望の学校を嫌々転校したんだよ？なのに一言謝れば済むと思ってるの？」

「何も言い返せない。謝っても許されないとわかっている。」

父さんはベンチから降り、僕の前に土下座した。

「お願いだ、今の家庭を壊したくない。“やっと手に入れた幸せなんだ”。」

血の気が引く。

「は？どういう事だよ。僕らはどうなってもいいってわけ？」

「金はちゃんと、先週から入れてあるし、今後も入れる。」

「金を払えばいいって問題なの？」

「すまない。」

「僕を、捨てるの？」

「すまない。」

溢れる涙。僕は急いで出口へと走った。

小さな僕が、そして僕が、泣いた。父さんに、捨てられた。家に帰ってこない父さんを軽蔑していた。でも、心の奥底では愛されたいと思っていた。

「いらっしやいま……おお圭吾！久しぶり。」

気付けば健司の店に来ていた。子犬達、子猫達がたくさんいる店。

「オヤジー、圭吾が来たあー。」

奥からオヤジと呼ばれた男が出てきた。何度かお会いした、スキンヘッドの男。



「おお、圭吾かあ。」

図太い声、首には金のネックレス。誰がどう見ても組にいそうな男。両手にはチワワ。

「可愛いですね。そのチワワ。」

「そうだろう！この前生まれればかりなんだ。」

オヤジさんは一匹、僕に手渡した。小さいけど温かいチワワ。オヤジさんは僕の顔をみて、頭に手を乗せる。小指の先がない大きな手。  
「よし、肉食いに行くか！」

店の近くにある安楽亭へ入る。柄シャツを着たオヤジさんが入るなり、店員の顔が引きつる。健司とオヤジさん。一緒に歩くとパシリの若造、になった気分だ。

「ご注文が決まりましたらお呼びください。」

アルバイトの女性は、水とお手拭きを置く。慎重に。

「飲みもん何にする。」

「あ、えっと……じゃあコーラで。」

「辞めとけ。」ギロリと睨む。

「骨が溶けるから辞めとけ。」

あ、はいすいませんとこじんまりとして謝る。骨が溶けるとか、健康に気を遣っているとは思わなかったので少し可笑しかった。

「オレンジジュースにしとけ。」

「はい。」

「じゃ、俺も。」

オヤジさんは3本指を立てる。

「オレンジジュース3つで。あと肉食べ放題」

店員はビツクリした顔で立ち去った。出されたオレンジジュースを強面のオヤジがストローでチューチュー飲む姿に思わず笑ってしまった。健司も笑う。オヤジさんも笑う。

「元暴力団がオレンジジュース飲んでるなんて笑えるよな。」  
健司が腹を抱えて笑う。

「えつやっぱりそつち系の人だったんですか？」

「こつちじゃねえぞ？」

オヤジさんはオカマの真似をする。怖いけど、とてもユーモアのある人。僕は、先程の出来事を忘れる為にも、いっぱい笑って、いっぱい肉を食べた。健司はオヤジさんを尊敬している。そんな二人を見ているだけで涙がポロポロこぼれてきた。

「食え食え」と泣く僕を二人は温かく見守ってくれた。

落ち着いた頃、僕は今日あったことを話した。デザートのパニラアイスは溶けていた。

「禁煙してるんだが。」

そういつてオヤジさんはタバコを一本出した。

「この話をする時はタバコがねえと上手く話せねえ。」  
フーツと煙を吐く。

「知つての通り、俺は男手一人でコイツを育ててる。」

また一吹き。

「嫁はな、コイツがちいせえ頃に逝つちまったんだ。」  
そうなんですか、と相づちをうつ。

「嫁はな、ソープ嬢だな。俺はその客だった。綺麗な女でな、俺はバカみたいに毎日通つた。そして嫁に結婚を申し出た。嫁は喜んだが、借金があるから結婚出来ねえって断つたよ。」

タバコの灰を落す。

「俺は嫁の為に働いて、危ない橋を渡つてなんとか嫁の借金を返したんだ。したらコイツが生まれて、そりゃあ毎日が幸せだった。でもな、幸せはそう長くは続かなくてよ、癌で逝つちまった。」  
吸いかけのタバコを消す。

「俺はこんな身でよ、頼る親戚の当てもなく、組から抜けてオヤジが残した小さなペットショップのあとを継いだんだ。まともに働いたことねえし、生き物扱うんでなかなか最初は上手いかなかった。」

水を一口。

「でもな、コイツには辛い想いをこれ以上させたくねえって思ってたよ。かーちゃんみてーに美味くねえが毎日弁当つくったし、授業参観にも、運動会にも出た。これしか、俺にはコイツにしてやれねえから。女じゃねえから乳もでねえし。」  
今度は健司が口を開く。

「そりゃあ授業参観の時にかーちゃんが来てくれるヤツは、正直羨ましかった。でもさ、一度だって寂しいって思ったことはなかった。学校から帰ってくるとオヤジが『おうおかえり』って言うてるし、一緒にメシも食えたし。」  
照れを隠しながら話を続ける。

「片親だつて、もう片方から大切にされてるってわかれば、辛くない。圭吾はさ、かーちゃんから愛されてないのか？」  
だまつて、首を振る。

「毎日、家に帰ると『お帰り』って言うってくれなかったのか？」  
「言ってくれた。」

「毎晩、一緒に夕飯食ってくれなかったのか？」

「食べた。」涙がまた、溢れてくる。

「お帰りの一言、夕食を食べる、それだけでも十分、愛情を感じないか？」

「うん。」かすれた声で返事する。

「大丈夫、お前は愛されている。」

オヤジさんの一言で声を出して泣いた。

「たとえオヤジがいなくなつたつて、お前のかーちゃんが、お前を愛しているから。今度はお前が、かーちゃんを支えてやりな。」  
愛されたい。愛されていないのではないか？自分の中での葛藤、不安

が、涙と一緒に流れ落ちた。父さんには愛されていない。でも、母さんがいる。そう思えただけでも、気持ちが軽くなった。いつも身近で僕を愛してくれる人が居ることに、気付いた。オヤジさんは僕を家まで送ってくれた。珍しく、母が起きていて、玄関まで出て深々と頭を下げた。僕も下げた。

「じゃ、また二学期な。」

「いつでも遊びに来いよ。」

車の音がどんどん遠のく。横にいる、やせ細った母に、初めて言った。

「今まで、ありがとう。今度は僕が、母さんを支えるから。」

夏休み。久々の家族旅行。鳥取に行きたいって言ったら、連れてつてくれるって。なんだか少し、照れくさいけど。東京よりも暑い鳥取。鳥取砂丘とか行ったり。あたしは久々に、焼けるほどの強い日差しに当たった。暑いけど、半袖は着ない。いつだって長袖。三泊四日の家族旅行。一日だけ家族みんなで過ごし、あとの二日は単独行動。私は晃子先生がいる学校に向かっていた。本来なら夏休みなので先生はいないのだけど、ちゃんとアポを取っておいたので、わざわざ学校にきて下さるらしい。晃子先生は小学校の先生になっていて、生徒から人気があるらしい。

久々の小学校。あたしの学校じゃないけど。建物や遊び場、校庭、何もかもが小さく見え不思議の国のアリスになった気分。晃子先生はたまたま、校門に植えてある草木に水やりをしていた。卒業アルバムに写っている写真より老けたけど、穏やかな顔つきになっていた。

「あなたが・・・西川沙織さん？」

「はじめまして。先日メールさせていただいた冴織です。夏休み中に、すみません。」

「いいのよ。昔の学校の生徒に会えるってそう無いわ。立ち話もなんだから、どうぞ」

晃子先生は学校内を案内してくれた。廊下には生徒達がつった絵画が貼られていた。私には、学校に行った記憶なんてあんまりなかった。

「どうぞ。」

クーラーの効いた教室。晃子先生がわざわざクーラーを入れてくださったのだ。あたしは高校よりも小さな、イスに座った。

「メールで一通りお話は見させて貰ったわ。」  
あたしの横に座る。

「もう、私はあなたの学校の教師ではないから、全てを話すわね。長くなるけどいいかしら？」

「是非、聞かせてください。」

「いつだっかしら・・・98年。当時の私達教師はね、すつごく驚いたの。きたの・・・98年。当時の私達教師はね、すつごく驚いたの。だって名字も、両親も、住所も違うのにうり二つの女の子が入学してきたんですもの。実は私が二人の副担任だったの。学校中話題になったわ。何しろ、彼女達は美人でそっくりなんですもの。私はね、移動教室の時に彼女たちに聞いたのよ。どういう事かって。そして彼女たちも初めは驚いたんですって。この世に自分と似た人が3人いるって聞いたことあるけど、本当に居たなんて、って。でもお互いご両親に聞いたらしいのよ。そしたら・・・血のつながった姉妹、双子だったの。」

「え？名字も、住所も違うのに？」

あたしは口を挟む。先生は淡々と話を続ける。

「そう。これは後で聞いた話なんですけどね、彼女たちは元々母親、つまり・・・真紀さんのお母さんの子だったらしいのよ。でも、とある理由でご両親が別れることになり、真紀さんは父親、真美さんは母親と暮らすことになったの。時が経ってそれぞれのご両親が再婚なさった。真紀さんも、真美さんもご両親が本当の親だと思っ  
ていたんですって。」

「残酷な、話ですね。」

「そうね。もっと酷いことが起きたわ。それは真美さんの義父さん、真紀さんの義母さんがそれぞれ怒ったらしいの。“この世にもうひとり真美（真紀）がいるなんて、考えられない。”って。酷い話なんだけどね。そして二つの家庭が話し合った。どちらかが遠くに引越すか。勿論どっちも譲らなかつたわ。そしてお父さんと、義父さんが、もみ合いになった。」

急に先生が黙り出す。あたしはじっと、晃子先生の顔をみつめる。

「義父さんが包丁を持ち出した。お父さんを守ろうとしたのでしようね、飛び出した真紀さんは、真紀さんは……誤って刺されてしまった。」

晃子先生はスカートをぎゅっと握る。義父さんはひどく慌てて、後日、自殺なさった。

「……これが彼女達の、あの学校の隠された真実。」

「そんなことがあったなんて……全然知りませんでした。」

「そう。誰も知らないように、学校が隠したの。」

「なぜですか？」

「私にはわからないわ。でも、人が二人も死んだら世間の風当たり、良くないでしょう？だからじゃないかしら。」

「え、じゃあ当時の生徒達も口封じされたってことですか？」

晃子先生は首を振る。

「演じたのよ。」

「え？」

「真美さんがね、真紀さんを演じたの。『突然ですが、転校することになりました』って。何しろ、双子ですから。誰も気付かなかった。」

「そんなことって、」

「あつたのよ。現実に」

あたしは、今聴いた話をゆっくりと整理した。

「じゃあアルバムの三年の写真は？」

「個人写真かしら？どちらも、真美さんよ。転校してしまった仲間と一緒に撮りたいっていった生徒達の要望で、ね。もちろんみんな、真紀さんだとおもっているわ。」

ドラマみたいな、出来事。真美さんの気持ちを思うと、胸が苦しくなる。どんな気持ちで、無くなった姉妹を演じたのだろう。

「そういえば……とある理由で別れたって、どんな理由なんですか？」

先生は首を振る。

「じゃあ、お父さん、義母さん、お母さんは生きていらっしやるんですよね？あと、真美さんも。」

「わからないわ。義母さんとお父さんは真紀さんが亡くなった後離婚なさったそうよ。お母さんはたしか・・・元々身体が強くなかったせいか、持病で亡くなったって。真美さんは卒業後、大学にも行かず、就職もせず、卒業式後音信不通。」

連鎖のように、人って亡くなるんだ。そう、思った。あたしは貴重なお話をしてくれた晃子先生に礼をいい、学校を後にした。頭の中がグチャグチャ。ひとまず、宿に帰ってゆっくり整理したかった。

宿に着くと、両親が既に帰っていた。あたしの両親は仲が良い。

カップルみたいに、いつだってラブラブだ。

「父さん達はこれから食事に行くけど、沙耶やは？」

「あたしはいいや。二人で楽しんできて。」

あたしの本名は西川沙耶。学校みんなは本名を知らない。もうお酒が飲める歳だったことも。携帯を開いた。アドレスに残された彼の名前。消せずに、ずっとあるその名前を眺める。そして、メールを打つ。

『久しぶり。アフリカに居るって聞いた。このメールをいつ見るか分からないけど、どうしても聞きたいことがあるの。石川真紀さんと、荒井真美について。山田晃子先生に全て聞いた。連絡、待ってます。』

深呼吸をし、送信ボタンを押す。あたしは、返事を待った。いつ返ってくるかわからないメールを。もしかしたら、一生返事がないかもしれないメールを。携帯が鳴る。気付けば寝ていたらしく、慌てて飛び起き、携帯を開く。圭吾だった。適当に返信する。また返ってくる。一言だったので返さない。また、メールが来る。しつこいと思いつつ、メールを見た。



『久しぶり。元気か？俺は今大阪にいる。話がしたければ、明日大阪に来い』

胸が高まり、あたしは急いで荷物をまとめて鳥取を後にした。運良く車で来ていたので夜道を走る。一刻も早く、彼に会いたい一心で何を話そう、何て言おう。ちゃんとした服、持ってくれば良かった。少女みたいな、気持ちになつて。途中のパーキングエリアで彼からのメールをチェックする。彼は今、大阪の吹田市と言つところに住んでいるらしい。一人で住むには広すぎる、マンションの一室で。明確な住所を聞き出し、アイスコーヒーを買つてまた走りだす。夜の高速道路は、あたしの妄想を膨らます。

早朝、辺りはまだまだ暗く、コインパーキングで駐車し、歩いて彼が住んでいるマンションへと向う。もちろん、外には誰もいない。マンションは東京にあるマンションほどは高くないけど、比較的新しかった。中に入るには、外のインターホンで彼に頼んで開けてもらうしかない。寝てるとわかっていても、もしかしたらという期待を胸に、インターホンを押す。応答がない。もう一度だけ、押す。やはり、応答は無かった。あたしは日が昇るまで車に居ようと立ち去ろうとした時だった。

『昔と、なんも変わってねーな』  
スピーカーから懐かしい声がする。

『起きてたの？』  
『起きてたの？』  
『起きてたの？じゃねー。起こされたんだよ。5階の505号室な』

ドアが開き、中に入る。エレベーターに乗る。日頃聞こえない心臓の音が、ドクンドクン、鼓膜を響かす。エレベーターを出ると、彼が立っていた。昔より、大分日焼けして、男らしくなった。

『よう。』

『バスローブの格好で、よく家から出られますね。』

「皮肉っぷりも相変わらずだな。まあ入れよ。」

奥にある505号室。彼の後をついていく。デザインされた、綺麗な部屋。言い換えれば、家庭的でない部屋。彼はキッチンに入り、私はソファアに座る。壁には彼が撮った写真が飾られている。

向かいあつて座る私達。彼が入れてくれたコーヒーをゆっくり飲みながら二人だけの空か何を楽しむ。

「荒井真美さんのことについて何か知らない？」

あたしから口を開く。彼はコーヒーを飲みながら、ニアリと笑う。

「知つてると思つたからわざわざ来たんだろ？」

kunio。それは彼の本名ではない。あたしは、彼の名前を知つている。浮野翔、それが彼の本名だ。

「意地悪なところ、変わらないね。」

「真美は生きている。」

「今どこにいるの？」

「さあ。」

「真美さんのお父さんについては？」

「生きてるらしいよ。」

短い会話。また沈黙。

「どうして知つてるんだい？」

「何が？」

「あの学校じゃあ今でもアノ事件に関することは誰も知り得ないだろう？先生達だつて、昔からいる方しか知らないだろうし。」

「あたしが彼女を知つたのはあなたが文化祭の時に展示した写真ですよ？」

「でもあの写真には本名なんて載せてなかった。」

あたしは黙る。

「何を隠してるんだ？」

翔が顔を近づける。

「……見えるのよ。」

ぼそつとつぶやく。何が？と翔が聞く。

「彼女がミエルの。霊として。」

翔は別に驚くこともなく、淡々と質問をする

「いつから?」

「入学してから」

「本名は、霊から聞いたわけ?」

「ううん。あたしは聞いてない。本名は友達が聞いたつて。本人から」

「その友達つて誰?」

「なぜ、そんなことを知りたがるの?」

あたしは翔をじつと見つめる。何か隠しているような、そんな気がした。

「何か、隠してるでしょう?」

翔は立ち上がり、飲みかけのコーヒを片手に、キッチンの方向に向かった。蛇口を捻り、水が流れる音。それ以外、何も聞こえない。あたしも立ち上がり、キッチンの方へと向かう。翔はワインセラーから白ワインを取り出し、二つのグラスに注ぐ。コールドワイン。あまりワインが好きではないあたしが、唯一飲める。

「知りたい?」

無言で頷く。

「じゃあ交換条件。脱げ。」

「は?」

「嫌なら俺も言わない。」

グラスを手渡し、乾杯して飲む。あたしはワイングラスをジッと見つめる。葛藤。別に、荒井真美さんや石川真紀さんについてスツゴク、知りたい訳じゃない。あたしが知りたいのは、彼の過去。翔が隠している過去が知りたいだけ。翔の全てを知りたいだけ。ワインを一気に飲み干し、キッチンで脱ぐ。一枚、一枚。翔は裸になったあたしにキスをし、抱き寄せる。そしてそのままソファに向かう。

「そこに座つて。」

言われるまま、座る。カーテンを開け、日差しが注ぐ。翔は棚に置

いてあったカメラを取り出す。

「何するの？」

「何って決まってる。撮るんだよ。」

「は？」

翔はレンズをのぞき込む。黒いカメラ、大きなレンズが不気味に見える。

「冗談じゃないわよ！裸の写真なんて。」

「知りたくないわけ？」

黙る。翔はシャッターを切る。後ろを向け、上を見る、言われるまま。恥ずかしさで顔が赤くなる。

「真紀は俺の彼女だった。」

カメラのシャッターを切りながら話す。

「俺達は中学の時から付き合っていた。あの学校を受験するのも、二人で決めたんだ。」

今度は立って、と指示を受ける。

「そしたら死んじまった。愛していたのに。」

翔の言葉が胸に突き刺さる。

「俺はな、犯人を捜しているんだ。」

「犯人？」

「そう。何で両親が離婚するある理由にはある人物が関わってたんだ。そいつを見つけて、殺す。」

冷たい言葉。

「だから、あまりあの事件について嗅ぎ回らない方が身の為だぜ？」

翔はレンズから目を離し、あたしに服を着るように言った。

「お前にとって、裸で写真を撮られることと、何も知らないお前等がああ的事件を嗅ぎ回るっていうのは、同じ事なの、わかってる？」

「知らなかった。悪気はなかったの。」

「じゃあこれ以上関わるな。調べるな。わかったら帰れ。」

翔はあたしの服を手渡した。あたしは夢中で着替え、逃げるように

出て行った。涙が溢れる。

あたしだって、ずっとあなたのこと、愛してるのに。

「おはよう。騒がしかったけど、誰か来たの？」

「おはよう。昔の友達がね、遊びに来たんだよ。」

「珍しいわね。友達が来るなんて。しかも早朝から。」

「あの事件が、何故か流行ってるらしい。」

「あら。何故？」

「さあ。でも放つてはおけないな。」

「あなたもそろそろ、動きましよう？私の方は、順調よ。そういえば、この前学校に足を運んだのよ。そしたらたまたま私を見た女子生徒が居ただけだね、なんて言ったと思う？」

「なんて？」

「真紀がいるつて。可笑しいでしょう？あの歳で真紀のことを知るはずがないのに。だから、殴っちゃった。そしてそそくさとその場を去ったわ。もしかしたら、彼女が何か握っているのかも、ね？」

いたずらに笑う彼女の頬を撫で、口づけを交わす。

新学期まであとわずか。夜突然電話が鳴った。麻弥からだ。電話に出るといつもの明るさはなく、大事な話があるからと家まで来て欲しいそうだ。夜外出することを少しためらったが、麻弥の家はここから二駅先ということで、自転車で乗って向かうことにした。秋

が近づいてきた。母も幾分元気を取り戻したようで、最近では近所程度の外出は出来るようになった。健司も元気のようにだ。

自転車をこぐ。こぐ。こぐ。

父さんのことは忘れられない。でも自分の中で、ある程度心の整理は出来た。

麻弥の家に着く、インターホンを鳴らす。ドアを開けてくれた麻弥。髪の色が黒に変わっていた。

「大事な話って、髪の色のこと？」

冗談を交えながら、お邪魔することになった。麻弥とは終業式以来連絡を取っていなかったの、なんだか新鮮だった。二階の部屋に入る。予想を裏切らない、麻弥らしい部屋。麻弥のお母さんがわざわざ飲み物とケーキを持ってきてくれた。冷たいカルピスを一気に飲み干す。

「話なんだけどね。」

「うん。」

いつになく暗い表情に、僕は身を構えた。

「冴織が、学校辞めたって。」

一瞬耳を疑った。冴織が学校を辞める？なぜ？

「どうして？」

麻弥が首を振る。僕は慌てて携帯を開く

「メールしたんだけど、返事がなくて。」

電話帳から冴織の名前を探し、電話をかける。出ない。

「このメールがね、さっき来たの。」

麻弥の携帯をのぞき込む。

『麻弥へ。久しぶり。元気にしてる？突然なんだけど、あたし学校辞めることになった。短い間だったけど、麻弥と過ごせて楽しかったよ。じゃ』

「私、どうすればいいのかわからなくて。」

麻弥はポロポロ涙をこぼす。

「家にはいつてみたの？」

「家、知らないの。」

携帯が鳴る。冴織からだ。急いで出る。

「もしもし、冴織？どうしたんだよ。」

「なんだ、麻弥に聞いたんだね。うん、ちよっとね」

「今どこにいるんだ？」

「それは今は言えない。あのね、聞いてくれる？」

僕は冴織から、晃子先生から伺った話を聞いた。

「・・・と、言う訳なの。でね、これ以上この事件について探りを入れない方がいいわ」

「どうして？」

「それは・・・危険だから」

無言になる。冴織は外にいるのだろう、風の音が聞こえる。

「・・・あのさ、これは麻弥には言うて欲しくないの。聞いてくれる？」

「うん。何？」

「あたし、今年で22歳なの」

「え？」

「あたしさ、小学校もろくに言うてなかったんだ。道を外して、ね。小学校に上がると同時にいじめにあつてさ。いじめっ子がさ、お兄さんが暴走族らしくてね。そしてあたしは色々あつて、その族に入るようになったの。たばこもお酒も、ヤクも全部体験して、荒れ狂つて、少年院にプチこまれて。で、ヤク買うお金欲しくて身体売つて。」

突然の告白に、ただ相づちをうつしかなかった。

「たまたま通りかかった学校でね、文化祭がやっててね。何を思ったのか、中に入ってあの写真にであつた」

「うん。」

「綺麗だった。あたしにはない、輝きがあつた。汚れのない、あたしが一番求めているものが写つてた」

風の音で少し聞こえにくい。

『この学校に行きたいっておもったんだけど。ヤクってそう簡単にはやめられないわ。で、やっと今、学生になれた。』

麻弥が心配そうに僕をみる。僕は大丈夫だと、合図した。

『ホントはもっと学生生活楽しみたかったし、麻弥や圭吾といっしょにいたかった。でもね、ごめん。さようなら』

プチッと電話が切れる。かけ直しても出ない。今度は麻弥の携帯が鳴る。メールだ。

『ありがとう。でも、泣かないで。この後起こることに。さようなら、だいすきだよ』

夏。

蝉の死骸が転がる。

僕は死骸を蹴飛ばしながら、歩く。

西川沙耶。

飛べなくなった蝉の様に、東京の空を舞った。

夕焼け、僕はひとり、学校の教室に戻る。誰も居ない教室で、泣き叫ぶように訴える。

「なあ冴織、居るだろう？冴織だったら、霊になって出てきてくれるだろう？お願いだ、返事してくれ、出てきてくれ」

今日はよく、風が吹く。

「真紀、いるんだろ？」

黒板の一点を見つめる。うっすらと、真紀の姿が見える。



「冴織に会わせてくれ」

真紀は、悲しそうな顔をし、首を振る。

「なんでだよ！なんで真紀は霊になって現れるのに、冴織は出てこないんだよ！」

真紀が、涙を流す。

冴織。

どうして自分から命を捨てたんだ？

冴織。

どうして。

二学期。沙織が亡くなった後でも学校はいつも通りある。皆、沙織のことなんて忘れてしまっただろう、それくらい“いつも通り”の学校。D組もいつも通り。僕の目の前にある沙織の席には、いつも綺麗な花が飾られている。麻弥が毎朝水を取り替え、枯れてきたら新しい花に取り替えているのだ。勉強にちつとも力が入らず、9月半ばに行われる文化祭にも興味がわかかった。うつろな表情、どこか上の空。それは僕だけでなく、麻弥もそうだった。僕たちはよく授業をさぼり、一番沙織を感じられる写真部へと通った。沙織が撮る写真はどれも、笑顔の絶えない写真ばかりで、そのなかに僕の写真もきちんと収められていた。ポロぞうきんのようなあつた頃。沙織がいなければきつと、今の僕はいなかっただろう。そう考えると、枯れたはずの涙がまた、出てきそうになり、ぐっと堪える。

「やつぱり、僕、真実を知りたい。」

写真を眺めていた麻弥は顔を上げてじつとこちらを見る。

「真実って？」

パタン、と音を立ててアルバムを閉じる。麻弥は最近食べ物が喉を通らないらしい、日に日に窶やつれていくのがわかる。

「石川真紀や、荒井真美、そして沙織の真実。」

「もう、真紀さんのことは追わないって約束したでしょう？」

麻弥はキツと僕を睨み付ける。

「でも、どうしても知りたいんだ。そうじゃなきゃ、僕らは前には進めないよ。このままじゃいけないって思うんだ。」

僕はじつと麻弥を見返す。

「もう、やめてよ。思い出して辛くなっちゃうから」

泣き出しそうな麻弥に、ごめんと謝り写真部を後にした。しばらく見ていない真紀の姿。僕は思い切って昔のクラスに足を運ぶことに

した。きっと、彼女はあの席にいるはずだ。

昼休み。昔のクラスが近づくにつれ、僕の足取りは重くなった。廊下ですれ違ふ人々の目が気になる。廊下でたむろする男子数人が僕に気づき、ニヤニヤしながらこちらに近づいてくる。肩に手を回し、まるで獲物を捕らえたかのような目つきで僕をなめ回すように見る。

「あれえ〜どうしてD組の藤川君がこんな所にいるのかなあ?」  
僕はずしつと重い肩をふりほどくようにして、教室に入ろうとした。すると中にいた男子がドアに立ちふさがり、僕を睨み付ける。

「何の用?」

「どいてくれ。」

「あ?何様な訳?」

僕は震える身体に力を入れて、力強く、  
「真紀に用があるんだ。どいてくれ。」

と怒鳴った。と、同時に男子達を含め、元クラスメイトが爆笑した。  
「おい、聞いたか?真紀に用があるだつてよ。ウチのクラスに真紀つてヤツ居たっけか?」

「キチガイD組に居て頭可笑しくなつたんじゃねーの?」  
わらわらと男子達が僕を取り囲んだ。

「真紀、話がある、お願いだ、出てきてくれ!」

「おいおい、キチガイはキチガイのクラスに行つてきなッ」  
と腹をおもいつき蹴られた。溝うちに入り、僕はうずくまった。息が出来ない。やっこの思いで息ができたと思ったら、今度は頭を上履きを履いた足で地面に押さえつけられた。

「圭吾。」

真紀の声だ。しかし、頭を押さえつけられているので、見上げるこゝとが出来ない。腹の痛みに耐えながら、声を振り絞つて出す。

「真紀、真美と父さん、義母さんは今どこにいる?」

「あ？なにコイツ、誰に話しかけてんだ？キメー。」  
ぐっと持ち上げられ、サンドバックの様に殴られる。

「圭吾、逃げた方がいい。」  
ガンっという音と共に、目の前が真っ暗になった。

「真美・・・！」

おびえる子羊のように、父親は腰を抜かし、私を見つめた。

「あら、覚えていたの？」

フローリングに、ヒールの音がコツンコツンと鳴り響く。

「どっつどっつしてこっここんなことを・・・！」

「どうして？さあ、どうしてでしょう。」

フフフっと思わず笑みがこぼれる。口をふさがれても叫ぶ雌豚を蹴り飛ばし、私は父親の髪の毛をつかんだ。

「さあ、この包丁を持って。」

両足の腱を切り、歩くことも出来ない父親に包丁を握らせる。

「殺るのよ。」

私は雌豚と小さな子豚を指さした。

「やつつやだ！」

私は縛り上げた雌豚と子豚を父親の前に差し出した。逃げ出そうとする父親。

「あら、見捨てるの？」

という言葉にピタリと動作が止まる。良い子ねと、白髪交じりの父親の肩に手を乗せ、耳元でささやく。

「さあ、選んで。どちらかを殺せば、もう片方とあなたを生かしてあげる。」

荒い息と震えで父親はがたんと、膝をついて立つ。

「昔みたいに、ねえ？できるでしょ。ほら、早くしないと私がどちらも殺しちゃうわよ？」

私はナイフを子豚の首元に当てた。チラと父親に目をやる。いいの？切っちゃうわよ？さあ早く！

しばらくして、父親は無言で雌豚の方に近づく。雌豚はおびえて首を振る。必死に何かを訴えようとしている。私は子豚の顔を押しさえつけ、父親が母親を殺す様子を焼き付けさせた。

「いい？これがあなたの母親と父親よ。」  
そつと耳元でつぶやく。小さな黒い瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。あまりのことに、声を上げて泣き叫ぶことすらしない。父親に似て、良い子ね、とそつと頭を撫でてあげる。静かになった雌豚の前に呆然と立ちつくす父親。

「ねえ、母親を殺した父親に対して、将来娘は何をするとおもおう？」

満面の笑みで問いかける。荒い息の父親は私をじつと見る

「復讐よ。わかる？だから今あなたはここで死んだ方が身のためだと思っの。」

何を言っているんだ？という目つき。

「いずれ娘に殺されるのよ？だったら、大事な娘が罪を犯す前に自分で死ぬのが親つてもんじゃない？」

小さな頭を撫でる。

「それか、私が罪を犯す前にこの子をあの世に送ってあげるわ。」

「やつつやく、やく、約束が違うじゃないか！！」

「ええ、約束はきちんと守って今貴方たちを生かしてあげてるじゃない。でもね、私は将来のことを考えて提案しているのよ。どうする？」

自殺した父親の息の根が止まる前に、握りしめた包丁を、そのまま小さな女の子の胸に刺した。静かになった部屋に、灯油をまき、火を付けた。

真紀、私ついにやったよ。

待っててね。私もそっちに、直ぐ行くからね。

大きな青空、赤く染まった手を太陽にかざしながら。

目を開ける。グワン、グワン、グワンという耳鳴りと頭痛、視界が良くない。しかし、ぼんやりと麻弥の姿が見えた。

「ま・・・や？」

「圭吾ッッ」

麻弥はぎゅっと抱きついてきた。痛みで思わず声を荒げる。しかし、声はかすれて上手く出ない。ごめんなさい、でも本当に心配したんだから。と麻弥は大粒の涙をこぼしながら僕の手を握りしめた。

「大丈夫？」

もう一人の声。そう、それは紛れもなく真紀の声だ。しかし姿は見えない。

「真紀？」とぼそりとつぶやく。

「真紀？私のこと、わからない？」

「ううん、何でもない、麻弥。・・・ここは？」

「病院。学校の近くの。もうすぐしたら圭吾のお母さん、来るって。」

麻弥にお願いをしてベッドをたててもらおう。外は西日が差していた。

「圭吾、逃げた方が良い。」真紀の声だ。

「逃げる？」

「え？」

「いや、真紀が。聞こえない？」

麻弥は首を横に振る。真紀の声は、どうやら僕にしか聞こえないようだ。

「あたし、ちょっとお茶買ってくるね。」と、麻弥が席をたった。

「圭吾、逃げた方が良い。」

「さつきから、何？」

姿の見えない真紀。声を頼りに、真紀の姿を探す。

「時が駆け戻る。早く逃げないと、圭吾、」

コンコン、とノックの音が聞こえた。どうぞ、と声を掛ける。

失礼します、と二人が入ってきた。

僕は息を呑む。一人は見知らぬ男性、もう一人は 真紀だ。

年を取った、真紀。

「ふふふ、驚いてるわね。真紀、じゃないわよ。私は真美。」

ふわりと、カーテンがなびく。

「この日を俺はずっと待っていた。」

男性が、ポツリとつぶやく。西日に反射して輝く刃。反射して視界を遮られる。

「今から君には死んでもらう。」

## エピソード

私が初めて担当した事件のことを、今でも覚えている。  
三人家族殺人事件、そしてそこに秘められたもう二つの家族。

最後の菊の花束を供え、手を合わせる。  
ジワジワと蝉が鳴く。

「アツチーな。」

暢気な田中。彼は毎回、この墓参りについてくる。

「ほんとね」

じゃあ、と別れを告げて、彼等の墓を後にした。長い階段を降り、  
田中が運転する車に乗り込んだ。ブルル、と音を立てて車を発進さ  
せる。

「・・・なあ、そろそろ教えてくれてもいいんじゃないの？」

田中はいつもこの事件の真実を知りたがる。私はこの真実を墓場ま  
で持って行くつもりなだけども。

「うるさいなー。そんなに知りたければ教えるけど、後悔しても  
知らないわよ？」

「お前とこうやって休日を過ごすだけで後悔・・・なんでも  
ありません。教えて下さい、木田様」

「ホンツツト、調子いいわねーあんなって人は。」

たばこ火をつけ、ふうつと一息つく。

「むかーしむかし、あるところに双子の女の子が生まれました。」

「いや、フツーに話してくれていいから。」

うるさいわねー。・・・その双子はとても可愛らしい女の子  
で、真美と真紀と名付けたんだって。でも幸せは長くは続かず、父  
親は新しい女性と出会い離婚。その後真美は母親の手で、真紀は父  
親の手で育てたんだって。でもこの父親は最悪でね。真紀達が9歳



の時また外で新しい女を作って。しかも今度は相手の女性を孕ませて10歳の時に一人の男の子が生まれた。名前は圭吾。器用な父親は二つの家庭を往き来し鼎談だけど、知っての通り、真紀達が高校に上がると出会って・・・ってあとはわかるわよね？で、真紀は死んだ。何も知らない圭吾と不倫愛の女は幸せに暮らしていた。

真美はその後、ソープ嬢になり、身を男共に捧げた。自分の身体を売って大金をかき集めた。その金で一人の女性を買ったのよ。

「え？レズだったわけ？」

「違う。」

父親好みの、不法入国したフィリピン女性を。そして真美はこういったわ。

「あなたを自由にしてあげるから、この男（父親）と結婚して。」  
ってね。

圭吾が中学生の時、馬鹿な父親は真美の手にまんまとハマリ、フィリピン女性と結婚した。そしてまた、一人の女の子を授かった。圭吾達の家から逃げ、中憤ましく三人で暮らそうとしていた。

でも、それが真美の本当の狙い。彼女は父親、フィリピン女性、そして幼い女の子を殺した。圭吾の方は 昔真紀の彼氏だった浮野<sup>きの</sup>って男に殺されかけた。

「・・・コレが真実よ。」

短くなったたばこを消し、新しいたばこに火を付ける。

「そりやまた。父親はとんだプレイボーイだな。」

「ホントに。」

「そういえば圭吾だっけ？そいつは生きてるのか？」

「わからない。ただ、事件があった病院のベッドには浮野の血ではないものが大量にあった。でもその血はベッドの上だけで地面に

はなかったのよ。まるで神隠しにあつたみたいに。容疑者の男性も、真美も一向に口を開かないし。」

「へえ。……って事は、まてよ……今誰が生きてんだ？」  
チラと横目でみる。危ないか等前を見て運転しろと小突く。

「圭吾は行方不明。真美と浮野は独房で自殺。当時のことを知るのはこの私だけ、かな。」

「ふーん。結構詳しく知ってるね？」

「まあね。当事者ですから。」

キキーツと音を立てて急ブレーキをかけた。アブネーな、クソ！と思わず口走る。

「は？どついう事？」

「だから。当事者。つまり一番始めに真美真紀、そして圭吾の父親に手を出したのはこの私。」

幼なじみの彼とばったり出会わなかったら。

多くの命が救えたのに。

私はこの仕事を通して、行方不明の圭吾を探し、謝りたい。

真美、真紀、そして愛する貴方。

貴方を愛した女性達と小さな女の子。

ごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1923/>

---

夕日、彼女とワルツを

2010年10月14日16時53分発行